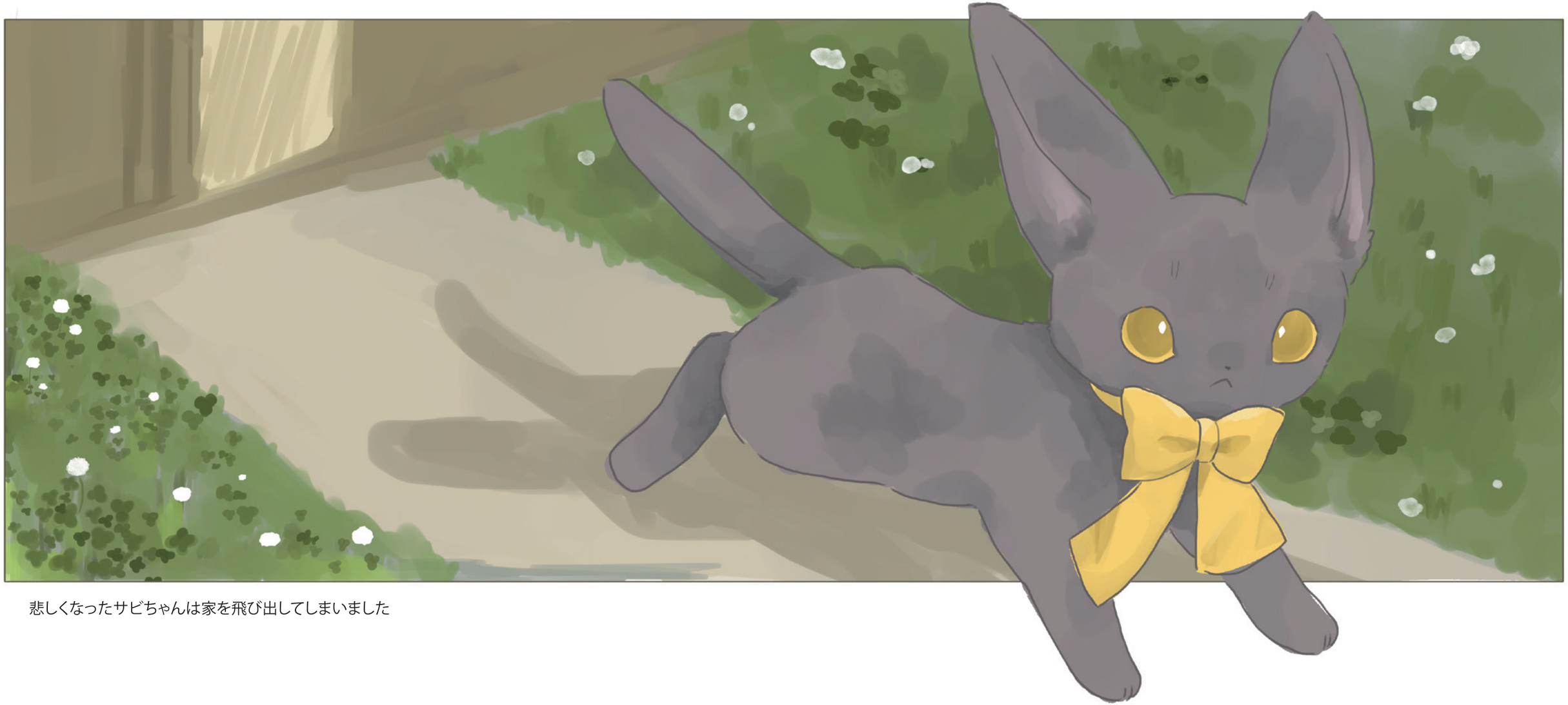
サビちゃん

え・ぶん　きらら

サビちゃんは 5 人兄弟の末っ子やんちゃでいたずら好き今日も兄たち
にちょっかいをかけて遊んでいました。
ある日サビちゃんは悩んでいましたママも兄たちも真っ白なのになん
で僕はサビ柄なんだろうなんだか僕だけ家族じゃないみたい。



悲しくなったサビちゃんは家を飛び出してしまいました

しばらく走ると深い森につきました。この森は黒ヒョウの住む森ビクビクしながら進むと沢山の黒ヒョウの中に

１匹だけ白ヒョウがいました。サビちゃんは気になり話しかけます

「白ヒョウさん、白ヒョウさん何でここは黒ヒョウの森なのに白ヒョウがいるの？」

「私は黒ヒョウよアルビノなのだから真っ白な黒ヒョウ面白いでしょ」

「アルビノって？」

「みんなと違って体の色が少ないの」

そう言うと白い黒ヒョウはくるりとまわって見せました。

サビちゃんはまた尋ねます

「１匹だけ色が違くて嫌ではないの？」

「ぜーんぜん色が違くても私たちはみんな仲間それになんだかかっこいいでしょ？」

サビちゃんは納得がいきませんどんどん森を進んでいきます
すると海につきました。海ではイルカ達が歌っています。
るーるーらーらー　るーるーらーらー
楽しそうに歌うイルカの中心にいるのはピンク色のイルカ不思議なピンクのイルカにサビちゃんは話しかけます。
「ピンクのイルカさん、ピンクのイルカさんなんでイルカなのにピンクなの?」
「私はみんなと違ってアマゾンから来たんだよ」
そう言うとピンクのイルカは優雅にジャンプをしました
サビちゃんはまた尋ねます
「みんなと色が違くて嫌ではないの?」
「ぜーんぜん色が違っても心が繋がっているの、それに私を見ると幸せになれるって噂」
るーるーらーらー　またイルカ達は歌い出しました

サビちゃんはやっぱり納得しません　どんどん進んでいきます

すると目の前でおかしな光景　何かがチカチカ色を変えています。

「君はだれ?」　サビちゃんが聞きます

「カメレオンさ」カメレオンが答えます

「カメレオンさんは色を変えられるの?」

「あぁ自由どんな色にもなれるんだ　擬態が得意」

するとまたカメレオンの色が変わります。赤　青　黄色

サビちゃんはまた尋ねます

「色が変わるのを変だと思ったことはない?」

「ぜーんぜん色の変わる僕が好き　特別な僕が好き」

カメレオンは木に擬態して何処かへ消えていきました

少し歩くと町にでました

人間の子供たちが遊んでいます

人間は肌の色がみんな違う毛色の違う僕みたいだなとサビちゃんはしばらく

ぼんやりと人間を眺めていました

すると少年がサビちゃんに声をかけました

「可愛い猫さん僕たちと遊ばない？」

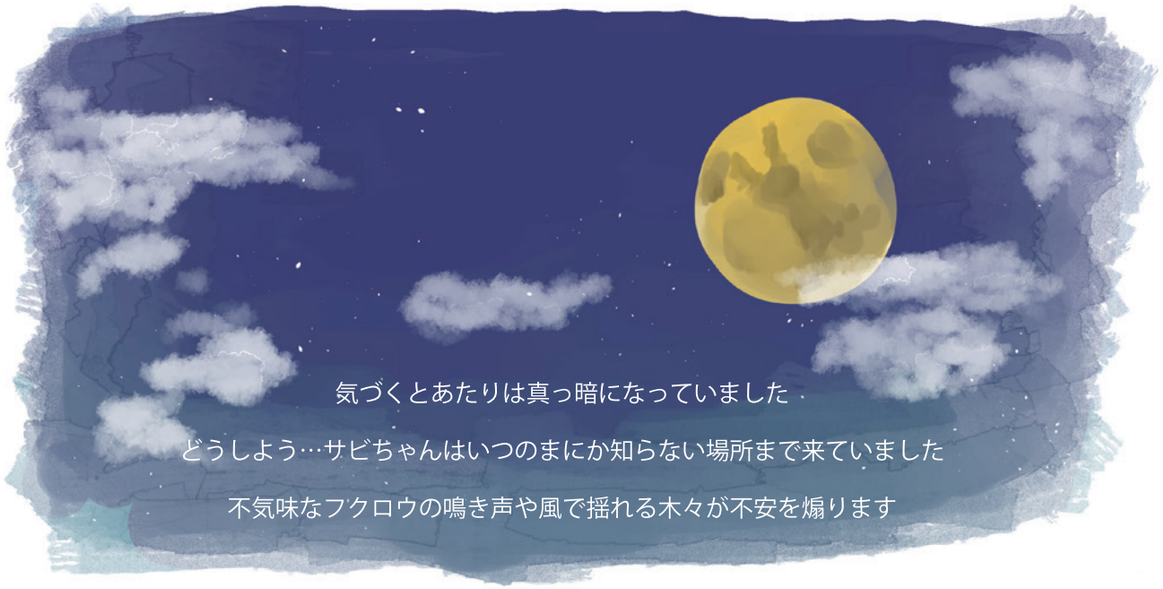
サビちゃんは言いました

「肌の色が違うのは気にならない？」

少年は笑顔で言います

「友達に肌の色なんて関係ないよもちろん猫でもね」

サビちゃんは少年達と日が暮れるまで遊びました。



気づくとあたりは真っ暗になっていました

どうしよう…サビちゃんはいつのまにか知らない場所まで来ていました

不気味なフクロウの鳴き声や風で揺れる木々が不安を煽ります

もうみんなに会えないのかもそう思うと涙が溢れてきました、

「ママーーー」

サビちゃんの泣き声が夜の空にこだまします

するとどこからか「サビちゃーん」と声が聞こえてきました

「ママだ!!」　声のする方に走っていくとママと兄弟達がサビちゃんを探していました

サビちゃんは思わずママに抱きつきます

「家を飛び出してごめんなさい僕だけサビ柄なの変じゃない?」

「色なんて関係ないの大事な家族ママもお兄ちゃんもサビちゃんが大好きなんだから」

サビちゃんはもう色なんて気にすることはありません
自分のサビ柄が前より好きになりました